

研究主題

思考力・表現力を高めるための授業づくり
～ユニバーサルデザインの考え方を生かし、ICTを活用した指導の工夫を通して～

1 研究主題設定の理由

社会の変化は加速度を増し、複雑で予測困難となっており、しかもそうした変化が、どのような職業や人生を選択するかにかかわらず、全ての子供たちの生き方に影響するものとなっている。

しかし、このような時代だからこそ、子供たちは、変化を前向きに受け止め、私たちの社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしたり、現在では思いもつかない新しい未来の姿を構想し実現したりしていくことができるといえる。

そのため、将来を担う生徒には、学んだ結果としての学力だけではなく、学ぶ意欲と学ぶスキルとして、学び続ける意思、自分の学びを組み立てる力、あふれる情報を選択する力、他者との対話を通してよりよい納得解を構築できる力が求められる。学校においても、「教員の話聞いて終わる」授業から、「生徒自らが学び取る」授業へと改善を図っていく必要がある。

学習指導要領では「何を学ぶか」という教育の内容を重視しつつ、生徒がその内容を既得の知識・技能と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できる、「生きて働く知識」となることを含め、その内容を学ぶことで生徒が「何ができるようになるか」を重視している。

昨年度（令和4年度）本校では、ユニバーサルデザインの考え方を生かした指導の工夫を行い、本中学校区が身に付けさせたい資質・能力「思考力・表現力」「主体性」「自己有用感」のうち、特に「思考力・表現力」を育むことに重点をおいて研究を推進してきた。

その成果として、学校評価の教員アンケートでは、「生徒の思考力・表現力を向上させるため、ユニバーサルデザイン化に取り組んでいる」の項目が、80.8%（7月）から88.0%（12月）へと7.2ポイント増加した。また、学校評価の生徒アンケートでは、ユニバーサルデザインの考え方に基づく支援を必要とする生徒群（以下「UD生徒群」という。）について、「授業で分からないことがあったとき、何もしない」と回答した生徒の割合が、20ポイント以上減少し、「友達に質問する」と回答した割合が20ポイント以上の増加がみられた。

これらのことから、研究主題に基づく授業改善により、学習に前向きに取り組み、自ら工夫して学ぼうとしているUD生徒群の変化が見られたことが分かる。しかし、1月末に実施した復習テストでは、活用・発展的な問題における正答率の低さから、課題として、基礎・基本的な内容の定着と共に、思考を深めるための学習課題の設定など、思考力・表現力を伸ばすための更なる授業改善が必要であることも分かった。

そこで、本中学校区が児童生徒に身に付けさせたい資質・能力である「思考力・表現力」「主体性」「自己有用感」を育むために、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善に取り組む。中でも、本校の課題でもある「思考力・表現力」を育むことに引き続き重点において研究を行う。

その際、「教えないと分からない」生徒ではなく、「自ら学ぶ」生徒を育成するために、ICTを活用した授業の工夫・改善を行う。ICTの活用は、知識・技能の習得のみならず、思考・判断・表現や、他の生徒との学習状況の共有、学びの振り返りを行う際の有効な手段である。

思考力・表現力の育成を目指した授業づくりを重点的に行うため、ICTの活用を通して、互いの

考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させ表現する場面を設定するなどの工夫に取り組み、主体的・対話的で深い学びの実現につなげたい。このような学びの実現のために、教師一人一人が指導内容に関する専門性を高めるとともに、ユニバーサルデザインを生かした授業づくりのポイントとして「焦点化」「視覚化」「共有化」を図ることを意識する。また、教師相互の授業参観などを通して、ICTを活用した指導方法の工夫・改善を積極的に行い、授業力向上に努める。

なお、ICTの活用にあたっては、活用すること自体が目的化してしまわないよう留意し、教育効果を考えながら活用する。同時に、生徒がICTを日常的に活用することにより、予想しなかったような形で生徒の可能性が引き出されることも考えられることから、ICTの新たな可能性に着目し、教員が創意工夫してその活用を図っていききたい。

2 研究の仮説

教師が授業のユニバーサルデザイン化に取り組み、その方途としてICT機器を活用することにより、互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させ表現する場面を設定するなどの工夫をすれば、発達段階に応じた思考力・表現力が育まれるであろう。

3 仮説検証の視点

本校の生徒に身に付けさせたい資質・能力のうち、発達段階に応じた「思考力・表現力」について検証する。

	思考力・表現力	主体性	自己有用感
1 学年	情報を整理し、自分の考えや意見を表現することができる。	課題に対して、自分の考えをもち、取り組もうとしている。	友達の考えや表現を尊重し、受け入れていこうとする態度を養うことで、ともに学びあい自分に自信をもつことができる。
2 学年	論理的に考え、自分の考えや意見を分かりやすくまとめ、表現することができる。	課題に対して、自分の考えを持ち、自ら進んで取り組もうとしている。	友達の考えや表現を尊重し、受け入れていこうとする態度を大切にともに学びあうことができる。
3 学年	課題解決のために適切な方法を導き、適切な方法で相手に伝わるように表現することができる。	課題に対して、自分の考えをもち、よりよい方法を選択して、自ら進んで取り組もうとしている。	友達の考えや表現を尊重し、受け入れていこうとする態度を大切に、ともに自律的・自主的に生活するために学びあうことができる。

4 仮説検証の方法

生徒の「思考力・表現力」の育成について、次のとおり取組と成果から検証する。

検証内容	検証方法	時期・回数等
思考力・表現力	<ul style="list-style-type: none"> ・全国学力・学習状況調査 ・復習テスト（3年） ・実力テスト（1・2年） ・単元・題材における授業の成果物 ・生徒アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> ・4月 ・年4回（3年） ・年1回（2年）、年2回（1年） ・単元・題材ごとに適宜 ・年4回
授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ・実践事例の作成（各教科） ・教職員アンケート ・学校における教育の情報化の実態等に関する調査 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元・題材ごとに適宜 ・年4回 ・3月

5 研究の方向性

項目	取組内容
学びの環境づくり	①自他を尊重できる学級集団づくり ②自律した廿中三カ条(着ベル・環境・立腰/挨拶)の定着 ③自律した学習スタイルの定着 ④朝読書の充実 ⑤ICT機器を用いた家庭学習の実施 ⑥すべての生徒の居場所づくりと学習機会の保障 ⑦保護者への情報発信
授業づくり	①「廿日市中学校授業モデル」に基づく授業の展開 別紙1 ②校内授業研究を通じた授業改善 ・視点を明確にした計画的な校内研究授業とその参観 ・研究主題に沿った研究協議会の実施 ③ユニバーサルデザインを生かした授業づくり ・「焦点化・視覚化・共有化」を取り入れた授業の工夫 ・支援が必要な生徒の特性の把握と授業における支援の工夫 ④ICT機器の活用方法の工夫と有効性の検証 ・ICT研究推進会議による活用実践事例の共有 ・Google クラウドの活用事例の交流およびロイロノートの導入と活用

6 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について

(1) 主体的・対話的で深い学びとは

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の具体的な内容については、中央教育審議会答申(平成28年)において、以下の三つの視点に立った授業改善を行うことが示されている。教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や児童生徒の状況等に応じて、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるようにすることが求められている。

- ① 学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「**主体的な学び**」が実現できているかという視点。
- ② 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「**対話的な学び**」が実現できているかという視点。
- ③ 習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「**深い学び**」が実現できているかという視点。

(2) 各教科における配慮事項

学習指導要領には、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うよう示されており、各教科の配慮事項を次のとおり抜粋した。これらの配慮事項はこれまでも充実が図られてきたものであるが、各教科の特質を生かした学習活動の質を更に改善・充実させていくための視点として参考にする。

教科等	主体的・対話的で深い学びの実現に向けた配慮事項
国語	言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、言葉の特徴や使い方などを理解し自分の思いや考えを深める学習の充実を図ること。
社会	分野の特質に応じた見方・考え方を働かせ、社会的事象の意味や意義などを考察し、概念などに関する知識を獲得したり、社会との関わりを意識した課題を追究したり解決したりする活動の充実を図ること。また、知識に偏り過ぎた指導にならないようにするため、基本的な事柄を厳選して指導内容を構成するとともに、各分野において、第2の内容の範囲や程度に十分配慮しつつ事柄を再構成するなどの工夫をして、基本的な内容が確実に身に付くよう指導すること。
数学	数学的な見方・考え方を働かせながら、日常の事象や社会の事象を数理的に捉え、数学の問題を見だし、問題を自立的、協働的に解決し、学習の過程を振り返り、概念を形成するなどの学習の充実を図ること。
理科	理科の学習過程の特質を踏まえ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどの科学的に探究する学習活動の充実を図ること。
音楽	音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりするなど、思考、判断し、表現する一連の過程を大切に学習の充実を図ること。
美術	造形的な見方・考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ること。
保健体育	体育や保健の見方・考え方を働かせながら、運動や健康についての自他の課題を発見し、その合理的な解決のための活動の充実を図ること。また、運動の楽しさや喜びを味わったり、健康の大切さを実感したりすることができるよう留意すること。
技術・家庭	生活の営みに係る見方・考え方や技術の見方・考え方を働かせ、知識を相互に関連付けてより深く理解するとともに、生活や社会の中から問題を見だし解決策を構想し、実践を評価・改善して、新たな課題の解決に向かう過程を重視した学習の充実を図ること。
外国語 (英語)	具体的な課題等を設定し、生徒が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現、文法の知識を五つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。
総合的な 学習の時間	生徒や学校、地域の実態等に応じて、生徒が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ること。
特別活動	よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己実現に資するよう、生徒が集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく合意形成に関わり役割を担うようにすることを重視すること。

(3) 「個別最適な学び」・「協働的な学び」と授業改善

文部科学省の「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）」には、「個別最適な学び」・「協働的な学び」を充実していく上で留意することが、次のとおり示されている（一部を抜粋）。これらのことに留意しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から学習活動の充実の方向性を捉え直し、これまで培われてきた指導方法の工夫とともに、ICTの新たな可能性を指導のツールとして生かすことで、授業改善につなげる。

個別最適な学びを充実していく上では、基礎的・基本的な知識・技能の習得が重要であることは言うまでもありませんが、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力等こそ、家庭の経済事情など、子供を取り巻く環境を背景とした差が生まれやすい能力であるとの指摘もあることに留意が必要です。主体的・対話的で深い学びを実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた

効果的な取組を展開していくことによって、学校教育が個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育んでいくことが求められます。例えば、児童生徒の学習意欲を向上する観点からは、教科等を学ぶ本質的な意義や一人一人の学習状況を児童生徒に伝えること等が重要となります。

その際、I C Tの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を蓄積・分析・利活用することが重要です。このことは教師の負担を軽減することにもつながります。また、児童生徒がI C Tを日常的に活用することにより、自ら見通しを立てたり、学習の状況を把握し、新たな学習方法を見いだしたり、自ら学び直しや発展的な学習を行いやすくなったりする等の効果が生まれることが期待されます。

（中略）

「協働的な学び」においては、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげ、児童生徒一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出していくようにすることが大切です。例えば一斉授業においても、集団の中での個人に着目した指導や、児童生徒同士の学び合い、多様な他者とともに問題の発見や解決に挑む授業展開などの視点から授業改善を図っていくことが期待されます。また、学習内容の理解を定着する観点からは、単に問題演習を行うだけでなく、内容を他者に説明するなどの児童生徒同士の学び合いにより、児童生徒が自らの理解を確認し定着を図ることが、説明する児童生徒及びそれを聞く児童生徒の双方にとって有効であると考えられます。個々の児童生徒の特性等も踏まえた上で、「協働的な学び」が充実するようきめ細かな工夫を行うことが重要です。

「協働的な学び」の効果を高めるためには、学級経営を充実し、児童生徒が違いを認めて協力し合える学級づくりを進めることが必要です。例えば、学級活動（ホームルーム活動）で行われる合意形成の活動は、他の教科等での学習の質の向上にも有効であることを念頭に学級経営を充実することなどが考えられます。

また、「協働的な学び」は、同一学年・学級の児童生徒同士の学び合いだけでなく、異学年間の学びや他の学校の児童生徒との学び合い、地域の方々や多様な専門家との協働なども含むものです。知・徳・体を一体で育む日本の学校教育のよさを生かし、学校行事や児童会（生徒会）活動等を含め学校における様々な活動の中で異学年間の交流の機会を充実することで、児童生徒が自らのこれまでの成長を振り返り、将来への展望を培うとともに、自己肯定感を育むなどの取組も大切です。

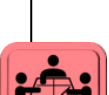
廿日市中学校授業モデル(基本形)

学習へ向かう姿勢づくり

- ロッカーの整理
- 廿中三カ条の確認
- 話す姿勢・聞く姿勢
- 学習係による行動目標の発表

授業の展開

- ※ ○○ は、効果的なICT活用にも挑戦！
- 「～できる」型の語尾でめあてを示す
 - 本日の学習の流れの提示
 - 思考を促す課題設定をする



言語活動の充実

- 分かりやすく表現する
結論先行型
根拠+理由付け = 結論
「私は○○だと思います。○○という事実があり、△なので、○○と考えます。」
- 大きい情報から説明
全体から部分へ 概要から詳細へ
- つながり発言をする
「私も○○さんの意見と同じで…」
「△さんの意見に似ていて…」
「□さんの意見に付け加えます…」
- YES BUT法(反論の型)
「確かに○○さんの意見は◎です。でも私の意見は△です。理由は…」
「○○さんの意見は△と言う点で大変理解できます。しかし□とも考えられると思います。」
- ※ICTを活用した表現活動にも挑戦！



- 思考のスイッチ★を押す
★友達と比べて/自分の体験と比べて/前回学んだことと比べて
★多くの視点で/他の見方は？
★具体例を挙げてみよう
★まとめるとどうなるの？
★特に重要なのは？
○思考ツールの活用
- 個に応じた指導(個別最適な学び)
○学習の手引き・ヒントカードの活用
○ワークシートの工夫
○発展コースやじっくりコース等、単元内で生徒が選択できる工夫

- ペア・グループの活用(協働的な学び)
○ペア・グループでの学習活動
○他との情報共有・意見交換の場を設定
○ホワイトボードなど教具の工夫
○役割分担やジクソー型の導入など

- 思考を深める切り返し
★その根拠は事実かな？
★その理由は誰もが納得いくものかな？
★根拠から結論まで筋が通ってるかな？
○思考を整理させる
○グループの意見を発展させる
○学びの深まりを創り出す

- 全体で本時に学習した学びを振り返る(必ずしも授業最後に提示しなくてよい)
- 自己評価、教員による評価